

# 生きづらさの時代

本誌十一月号では特集の一つとして〈爆発する「生きづらさ」〉を組み、いくつかの優れた論説を掲載している。阿部真大氏は、戦後日本人の幸福感を形づくったものは「戦後家族」だが、これがバブル崩壊後の「失われた三十年」の間に崩れ、さまざまな準拠集団（コミュニティ）の中で「勝ち組」と「負け組」との分断が生じているという。

分断を増幅し極端化させているものが、SNSによる怒りの感情を伴う投稿の拡散だと、山口真一氏はいう。確かにネットには極端で過激な意見のほうに投稿されやすい。ネットによって誘発された怒りを共有する人々が強く結びついて他の人々を排除し、社会の分断を深いものとしている、というのである。

この特集でさらに論じてほしかったのは、社会的分断が多様なコミュニティ間で生じていることはよく理解できるが、より深刻な問題はコミュニティ内部、率直に言って家族の内部でも、程度はさまざまであれ分断が生まれているという点である。

共同体の中で最も基礎的な共同体は、いうまでも

わたなべとしお

渡辺利夫（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇二〇年十二月退任）。二〇一七年六月より現職。

なく家族である。とりわけ貧困な家族が崩壊の危機に瀕している。生涯賃金において正規従業員の半分にも満たない非正規従業員が増加し、特に女性と若者の従業者においてその傾向が著しい。収入減、失職などが家族内のトラブルを誘発し、若年女性を自殺に追い込むといった事例が急増している。

有為な若者を塾生として、将来のエリートを育成する研修機関が松下政経塾である。四年制の第一年中間点でみずからの「志」を表明することになっており、そのための集會に、過日、私も招かれた。さすがに厳しい選抜を勝ち抜いた若者である。プレゼンテーションはいずれも際立っていた。おやと思わされたのは、政治、経済、外交などを論じる者が少なく、格差、家族、生きづらさといった、現代日本の深底部にあって、日本人の幸福感を左右するようなテーマに肉薄する者が多かったことである。そういう切り口で日本を論じることの重要性を、優れた若者たちはもうはつきりと認識し始めているのかという感慨をもたせてくれた一日であった。